Report
［査読無し］　報告

歌語「しめ（湿）る」について

柏木　由夫
大妻女子大学名誉教授
大妻女子大学人間生活文化研究所

キーワード：湿る、潤う、源俊頼、源氏物語

抄録

「しめ(湿)る」の語は、平安時代の散文作品から見える語で、主たる意味は六個に分けられるが、人についての用法が目立つ。歌語としては院政期に源俊頼と彼の周辺で、リアルな自然描写での語として用いられるようになるが、なお散文での用法をも加えて人についても使われるようになり、日本的湿潤な叙情を表す語となる。

一　発端

まず、次の「散木奇歌集」の一首について注目することから始めたい。

へたうさねゆきの卿のいるゑのうたあはせに、さみたれをよめる

くもはれぬさ月きぬらしたま衣　むつかしきまてあましめりせり

冷泉家時雨亭叢書『散木奇歌集』所収「源木工集・二九三」

（翻刻―新編増補私家集大成）

右の試約を示せば、次のようになるだろう。

別当実行卿家主催の歌合で、五月雨を詠んだ

雲が晴れない五月が来たらしい。美しい露の置いた衣がうんざりするほどぐっしょりと雨で濡れてしまったよ。

この歌の出典は、「永久四年（一一一三）六条宰相家歌合」である。判詞とともに示す。

五番　五月雨　左勝　源俊頼朝臣

雲晴れぬ五月きぬらし玉衣むつかしきまであまじめりせり

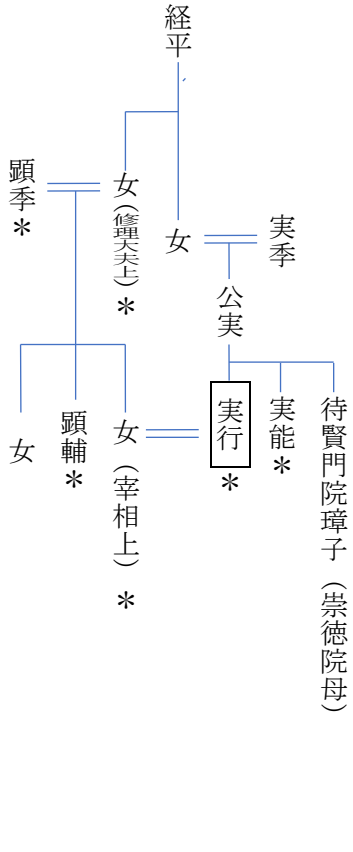
右　修理大夫上

五月雨にとふ人もなき山里は軒のしづくの音のみぞする

左の五月雨は、古めかしからぬことばなれど、「むつかし」などこそ、むげにただことばにて、げびたるやうに思ひ給ふれども、右のは目なれたる様なれば、負くとや申すべからん

（同歌合・九、一〇）

『新編国歌大観』の解説から要点を示すと、歌合名称の「六条宰相」とは、歌合を主催した参議の藤原実行(注1)。永久四年二月四日の披講。子日・霞以下の四季に祝・恋の一四題一五番。実行舅の藤原顕季が判者。作者は一四人で、源俊頼・藤原仲実の他、以下の系図にある顕季家のメンバーが半ばを占める。



歌合の判詞に拠れば、左歌は、「古めかしからぬことば」が良いとされ、「むつかし……げびたるやう」以下が批判で、それに対し右歌は、「目なれたる」と批判された。類例があり、新鮮味に欠けるとの意で、最終的に右は負、左歌が勝とされた。右歌の類例とは、

雨中閑居

五月雨にとふ人もなし山里は軒のしづくのおとばかりして

（顕季集・四五）

七番　五月雨　左勝　通俊

つれづれとふる五月雨は日もくれぬ軒の雫の音ばかりして

（承暦二(一〇七八)年内裏後番歌合・一三）

（宮内卿経長がかつらの山庄にてさみだれをよめる）

つれづれと音たえせぬは五月雨の軒のあやめのしづくなりけり

（後拾遺集・夏・二〇八・橘俊綱）

などが挙げられる。特に顕季集の歌は右歌に酷似し、歌合は顕季による代作かと推測される。

以下、左歌の歌語について見て行く。まず、「くもはれぬさ月」とは、常に雲がかかって暗い梅雨空の季節を言い、次のような先例もある。

五月闇雲間ばかりの星かとて花橘に目をぞつけつる

（好忠集・三八六・百首歌・夏）

「たま衣」は、俊頼以前に類例のない語で、「玉」は「涙」や「露」の比喩で用いられる。次に近い時代の例を示す。

君こふる涙の袖をあぢきなくたまの衣と人や見るらん

（元永元年（一一一八）新中将源雅定家歌合・三〇・藤原顕仲）

わぎもこが花の姿の女郎花玉の衣や秋の夕露　（長方集・七〇）

「むつかし」は、うっとうしい、不快だ、わずらわしい、気味が悪い、むさくるしいなどの意。歌語としての例は限られていて、前例は相模の歌から見え、それを受けると推測できる俊頼に好まれたが、継承されにくい個性的用語と思われる。

思はじや苦しやなぞと思へどもいさやわびしやむつかしの世や
（相模集・五九二―六十五首歌群末尾―）

芦垣の隙なくかゝる蜘蛛の網(い)の物むつかしくしけるわが恋
（経信集・九三、金葉集・恋下・四四六「芦垣に」）

蚊遣火の煙になるるこもすだれ物むつかしきわが心かな
（散木奇歌集・三四七）

秋きては風ひやかなるくれもありあつれしめらひむつかしの世や
（同・三七四）

柴の庵にはひおぼほれる青つづらむつかしげなる世にもふるかな
（同・一四八〇）

次に、「あましめり」は初例で、特に「しめり」は、五月の情緒を表す歌語として、次代への影響が大きいと推測される。「歌ことば歌枕大辞典」には、類語として「朝湿り」の項があるが(注2)、「しめる」について、以下で詳しくみてゆくこととする。

二　「しめる」の語義、『日本国語大辞典』を主にして

「しめる」の漢字「湿」は「濕」の略字で、「濕」は『類聚名義抄』に「ウルフ」の訓が示されている。ここでは、『日本国語大辞典』での「しめる」の項から、主に平安時代末までの用例と解説を抜き出して、それについての説明と考察を加える。

しめ・る【湿・沈】〔自ラ五（四）〕

①水分を吸ってしっとりと濡れる。水気を帯びてうるおう。

＊宇津保(970-999)蔵開中「しろき御衣ひきかけて、御ぐしは少しめりて、四尺の御厨子よりおほくうちはへて、やうじかけたると見ゆ」

＊枕草子(10C終)三六・七月ばかりいみじうあつければ「霧にいたうしめりたるをぬぎ、鬢のすこしふくだみたれば」

＊拾遺愚草（1216-33)上「雲のゆく堅田の沖やしぐるらんやや影しめるあまの漁火」

「拾遺愚草」の例は、「……漁火の火影がやや暗くなった」(注3)とあるように、実際は漁火について、次の②「火や灯火が消える」様子を描写しているのだが、作者の感覚として漁火の火影が湿ってきたように見えたということだろう。なお①の例として、

宮（匂宮）の忍びたる所より帰りたまへるにやと見るに、露にうちしめりたまへるかをり（源氏物語・宿木）

などもあり、「しめる」が香りと結びつくことも知られる。

②火や灯火が消える。

＊書紀(720)神代下（鴨脚本訓）「次に火炎（ほのほ）衰（シメル）時、躡（たたらを）誥（ふむ）出児（いでこ）亦（また）言（ことあげ）（新編古典全集訓を補った）（のりたまはく）」

＊蜻蛉(974頃)下・天禄三年「火しめりはてて、しばしあれど」

「日本書紀」の例については、『時代別国語大辞典　上代篇』では、「次火炎衰時躡誥出児（つぎホノホおとろふるニフミタケビ）」と読んで、「湿る」の項はない。この箇所について『小学館古語大辞典』では、

しめ・る【湿る】……②火が消える。火勢が弱くなる。「火炎（ほの）―・る［衰 シメル］時に」〈書紀・神代下・天孫降臨〉。……

語誌②の日本書紀の例は平安初期の訓。平安時代にも古辞書類にはみられない。それらには「うるふ」がみえる。「しめる」は漢文訓読系には当時あまり用いられなかったらしい。源氏物語には「うるふ」は全くみえず、もっぱらその意味には「しめる」（二十五例）が用いられている。「浸（し）む」「しめやか」と同源の語であろう。〔竹岡正夫〕

のように説かれていて、「しめる」が平安時代以後の読みであるとする。また、ほぼ同意と見なされる「うるふ」との和文と漢文訓読との区別、類似する同源の語などへの言及が注意される。なお②の例としては、他に、

おもしろきことに心はしみて、庭燎も影しめりたるに（源氏物語・若菜）

を加えることもできるだろう。

③雨、風などの勢いが静まる。衰える。

＊源氏(1001-14 頃)明石「やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに」

＊源氏(1001-14 頃)野分「暁方に風少ししめりて、むらさめのやうにふり出づ」

ここまでの「しめる」の対象は、髪・衣・灯火・雨・風だったが、④以下は人間に関わることとなる。

④静かになる。ひっそりと静まる。

＊源氏(1001-14 頃)椎本「夜深きほどの人の気しめりぬるに」

＊栄花(1028-92)玉の村菊「いとけ高くやむごとなき御有様にていみじく泣く、僧達皆しめりてきき候に」

同様の例として、「讃岐典侍日記」で、堀河天皇の臨終間近の描写がある。

このごろは、たれも、をりあしければうちしめりならひておはしませば（讃岐典侍日記）

⑤態度や性格などがしっとりと落ち着いている。

＊源氏(1001-14 頃)絵合「これは、人ざまも、いたうしめり、恥づかしげに、」

「絵合」の例は秋好中宮の人柄を表す。同様の人物の人柄を表す例を以下に挙げる。

夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、うちしめりたる宮(蛍宮)の御けはひ（源氏物語・蛍）

宰相（夕霧）もあはれなる夕べのけしきに、いとどうちしめりて、

「雨気あり」と人々の騒ぐ（同・藤裏葉）

⑥物思いに沈む。憂いに沈む。

＊蜻蛉(974 頃)下・天祿三年「今年は、天下ににくき人ありとも、思ひなほらましなど、しめりて思へば」

＊源氏(1001-14 頃)宿木「(中の君の）常よりも、しめり給へる気色の心苦しきも、あはれに推し量られ給ひて」

＊栄花(1028-92)峰の月「督（かん）の殿しめらせ給ひて、ながめがちにおはしますを、東宮いかにと見奉らせ給ふ」

右のうち、「蜻蛉日記」の「なほらまし」は、日本古典文学全集・日本古典集成・新日本古典文学大系で、ともに「嘆かじ」に〉校訂されていて、作者の夫への思いを表している。「源氏物語」の「宿木」は、匂宮と六の君との結婚の件で悩み沈んでいる中の君を表す。「栄花物語」は、後朱雀天皇尚侍嬉子の妊娠中の苦しみを描写する。同様の例を以下に加える。

帝(後一条天皇)いみじう遊び心おはしませど、この御悩みの後、世をおぼししめり、あはれなる御けしきにおはします。（栄花物語・鶴の林）

……生ひ先遠き人(夕霧)さへ、かく、いさゝかにても、世を思ひしめり給へば、いとなん、よろづ恨めしき世なる」とて、泣きおはします。（源氏物語・少女）

「栄花物語」は、帝が祖父に当たる藤原道長が臨終間近と知って、世の無常に心が沈むことを描く場面。「少女」は大宮の言葉で、夕霧が孫の雲居雁との思うに任せない恋に悲しんでいること言っている。他に「夜の寝覚」、「浜松中納言物語」、「とりかへばや物語」などにも同様の意味の例がある。

⑦雰囲気（ふんいき）が沈む。……以下省略

ここまで、①～⑥の散文例では、①②③以外、ほぼ人に用い（①も人に属す）、⑥には特に強い情感がある言えるだろう。

項目説明に続く「語誌」を以下に示す。主に同意味と見なされる「うるふ」との関係を詳述する。

⑴漢文訓読系の「うるふ」に対応する和文系の語といわれる。しかし、「うるふ」は「拾遺和歌集」「新古今和歌集」等の勅撰和歌集にも用例が見え、単に位相の違いによってのみ対立する語とは言い難い。

⑵和歌では「うるふ」は雨によって草木が濡れてみずみずしさを得たような場合に用いられるのに対し、「しめる」は多く「うちしめる」の形で、涙に関連した場合に用いられる。

⑶「うるふ」が恩恵を受ける意味合いを併せ持つのに対して、「しめる」は衰える意味合いを持つという対照的な違いがある。これは、不足・欠乏した水分が得られて活生する場合などには「うるう」「うるおう」を、不必要・不本意な水分を得て状態や性態が損なわれる場合などには「しめる」を用いがちであるという、現代語の用法に通じている。

繰り返しになるが、ごく要点のみを確認すれば、「しめる」と「うるふ」は、おおまかには和文系と漢文訓読系、水分を得ることは同じだが、それが不必要・不本意なことと、逆に恵みとされるという対極性があるということだろう。

三　「うるふ」の語義、『日本国語大辞典』と用例の追加

前節に導かれて、「うるふ」について、『日本国語大辞典』での記述を確認する。

うる・う［うるふ］【潤・霑】

【一】〔自ハ四〕

①湿りけを帯びる。ぬれる。うるおう。

＊西大寺本金光明最勝王経平安初期点〔830頃〕九「頭べ津（ウルヒ）膩（あぶら）つき、夢に水白き物を見む」

＊地蔵十輪経元慶七年点〔883〕一「苗稼花果を茂り実なり、成熟して潤沢（ウルヒ）」

＊公任集〔1044頃〕「ひとつ雨にうるふ草木はことなれど終には本に帰らざらめや」

＊書陵部本類聚名義抄〔1081頃〕「濡　ウルフ〔小切〕」

＊栄花物語〔1028-92頃〕日蔭のかづら「あめの下とみの小川の末なればいづれの秋かうるはざるべき」

②恵みを受ける。恩恵をこうむる。

＊将門記承徳三年点〔1099〕「将門の事既に恩沢に霑（ウルヘリ）」

【二】〔他ハ下二〕水気を含ませる。ひたす。ぬらす。うるおす。

＊今昔物語集〔1120頃か〕四・二五「遠国より来れば先づ水を飲て喉を潤へよと思食（おぼしめ）すなめりと」

〈以下略〉

前節の「語誌」にあるように、漢文訓読語での例が多く、例外と見られる「公任集」についても、「〇ひとつ雨に　薬草喩品の句に「雖二一地所一レ生一雨所一レ潤　而諸草木　各有二差別一」とある」（公任集全釈　二六三の語釈。返り点は補った）と、漢文訓読の引用で、これは「栄花物語」の典拠でもある。また、水を恵みとする点も「語誌」に沿うものである。

以下では、なお用例を加え、現代語訳あるものは、現代語を添えて、用法を確認したい。

▼月光似レ鏡　不レ明レ春　　寒気如レ刀　不レ穿レ花
大空雨絶　潤（うるほす）二草木一　　春風花開　覆二射袖（しやしうを）一

（新撰万葉集・二六四、他八首）

▼瓢箪屡空（へうたんしばしばむなし）　草滋二顔淵之巷一　　藜藿深鎖（れいてうふかくとざせり）
雨湿（うるほす）二原憲之枢（げんけんがとぼそを）一

…飲食物を入れる瓢箪も幾度となく空になった。その顔淵のあばら屋には、草が生い茂っていた。雑草のあかざが茂るに任せて、すっかり閉ざされていた原憲の家の戸も雨に濡れそぼつ始末だった。昔の賢人は貧しく草深い所に住んでいたもの

だ。（新古典全集[注4]　和漢朗詠集・四三七・直幹、他六首）

ながうた　よしのの宮にたてまつるうた

▼ちはやぶる　わがおほきみの　きこしめす　あめのしたなる草の葉も　うるひにたりと　山河の　すめるかうちと　みこころを　よしののくにの　花ざかり　……

…我が大君は、お治めなさる天下の民草の葉も潤った、と満足にお思いになり、山も川も清らかに澄みきった谷間の土地だとして、御心をお寄せになる吉野の国の、花盛り…（新古典大系　拾遺集・雑下・五六九・人まろ）

閑院大将殿、夏の夜の雨といふ題をよませたまふに、申すことあるほどにて

▼うるほひに濡るべき身とし知りぬれば降る夏の夜の雨もうれしき（輔親集・七七）

六月二ありし年の後六月七日、多田の源賢法眼の言ひたりし

▼つねならば今日いそがまし七夕の天の羽衣うるふべきかな

…普通の年ならば今夜の逢瀬を予想して牽牛星・織女星は今日準備をすることでしょう。それなのに今年は六月が二回もある閏年なので、七夕の着ている衣は涙でぬれることでしょう。（赤染衛門集全釈・四〇三）

…〇うるふー「潤ふ」に「閏」を掛ける。（和歌文学大系　赤染衛門集・四〇三）

法華経薬草喩品の心をよみ侍りける

▼おほぞらの雨はわきてもそそがねどうるふ草木はおのがしなじな

…大空の雨は差別をつけて降り注ぐわけではないが、それによって潤う草木はそれぞれ色々の種類によって異なることだ（仏法の恵みに差はないのだが、受け手には違いが生じる）。（新古典大系　千載集・釈教・一二〇五・源信）

社司ども貴船に参りて、雨請ひし侍りけるついでによめる

▼おほみ田のうるほふばかり堰きかけて井堰に落とせ河上の神

…神の御田がうるおうほど、水をせきとめ導いて井堰に落として下さい、川上に鎮座される貴船の神よ。（新古典大系　新古今集・神祇・一八九三・賀茂幸平）

多くの用例で、「うるふ」は、恵みの水で、かわきが癒やされるイメージだと確認できる。その中で「和漢朗詠集」「赤染衛門集」の場合のみ例外と見られる。しかし、これらと同様の例も少数だが見いだされる。

▼……五月雨は　うき世の中に　ふるかぎり　誰が袂か　ただならむ　たえずぞうるふ　五月さへ　重ねたりつる　衣手は　上下分かず　くたしてき……

…五月雨のころ、このつらい世の中に生きている人は、だれひとり袂を濡らさぬものとてなかったのでございます。そのうえ、その五月まで閏で重なり、かわくひまのない袂は、身分の上下

を分かたず、涙に濡れしおれてしまいました。（古典全集　蜻蛉日記・中巻　安和二年六月）

▼……をり知り顔なる時雨うちそゝぎて、木の葉さそふ風、あわたゞしう、吹き払ひたるに、御前に侍ふ人々、物いとゞ心細くて、少し隙ありつる袖ども、うるひわたりぬ。

…こうした折の気持ちを察するかのような時雨がさっと降って、木の葉を散らす風があわただしく吹き払うので、御前にお仕えする女房達は、わけもなくまことに心細くて、少しとぎれることもあった涙をまた催し、皆々袖を濡らした。（古典全集　源氏物語・葵）

▼……春の衣一対、直千金。汗に沾ひ粉に汚れて、再び着ず

…春の着物は二かさねで、値は千金。汗に濡れたり白粉で汚れると、二度と着ることはない。（新編古典全集　栄花物語　巻十七音楽）

「蜻蛉日記」は、安和の変で太宰権帥の左遷された夫兼家妹の愛宮への同情と慰めの長歌の一節で、「閏五月」を掛ける。「源氏物語」は、葵上の死後、左大臣邸から桐壺院へと源氏が向かう場面での侍女達の様子を描く。これらは、「赤染衛門集」の例に同じく、恵みの水とは言えず、悲しみの涙を表している。「栄花物語」は、「白氏文集」の「楽府」の引用で、これのみ漢詩で、用法は「和漢朗詠集」の場合に近いだろうか。以上から、「日本国語大辞典」での「うるふ」の理解には若干の修正が必要だと言えるだろう。（注5）

四　平安時代からの歌語「しめ（湿）る」の用法

以下では本論の中心とする、平安時代から鎌倉初期の「新古今集」頃までの歌語「しめる」を詠む和歌を、『新編国歌大観』による検索によって抜き出して、ほぼ時代順に見て行く。なお、歌末の（　）は各歌の主たる場を表し、注釈がある和歌は、「しめる」の前後に当たる部分の現代語訳、または解説を示した。

1　四月一日あるところにて

身にしめるまだ花の香もあるものをとくも隔つる夏衣もかな（人）

…衣にはまだ深く花の香が染みついて残っているのに

（源兼澄集全釈・九一）

2　前大和守かげまさが、たき物こひしに

身にしまば咎めもぞするたき物の煙は風にまかせてを見よ

返し

移るとも誰か咎めんたき物のこの香ばかりは身にもしめらむ（人）

…この薫物の香だけは、この身にも染ませたいよ。

（大弐高遠集注釈・二九五、二九六）

3　あるやむごとなき人の、ゆゑありときこしめすむすめのもとに、梅花つかはすをみて

花の香に心はしめり折りて見な其一枝に実こそあらねど

（人）

…美しい花の香りに心はすっかり魅惑されてしまいました。あんな美しい花なら、ぜひ手折って見たいものです。あの一枝に実こそついてをりませんけれど。

（和泉式部集全釈―続集篇―・三六三）

右の1～3は、「香」が身や心に「染め」または、「沁め・浸め（しみる）」だと思われる。

丹波守（大江匡衡）亡くなりて、七日の誦経にすとて装束ども取り出でたるに、睦月に着たりしかば、練り襲のあざやかなりしに

4　重ねてし衣の色の紅は涙にしめる袖となりけり（人）

…重ね着をしていた衣服の色の紅色は、涙にしみてくれないの袖となったことだ。（赤染衛門集全釈・二六八）

…悲しみのあまり紅の涙で染まった。

（和歌文学大系　赤染衛門集・二六八）

4の「紅」も「染める」だが、「涙」に「湿る」とも解せる。ここまで、「色・香」に「染む」が主。

いつの事にか

5　御狩りする垣の根摺りの衣手に乱れもどろにしめるわが恋（人）

…根摺りの衣の袖が涙で乱れまだらになり、しめっぽいわが恋を嘆く歌。（古典大系　平安鎌倉私家集　経信集・二三二）

5は「湿る」の解の初出と見られる。しかし、この歌は「恋しくは下にを思へ紫の根摺りの衣色に出づなゆめ」（古今・恋三・六五二）が本だから、「乱れもどろに染める」とも解せる。「まめなれどよき名もたたずかるかやのいざ乱れなんしどろもどろに」（古今六帖第六・かるかや・三七八五）も背景に想定できる。

6　急ぎ取れ今は早苗も生ひぬらん田子の裳裾は朝じめるとも（人）

…急いで田に植えなさい。今は早苗も十分生育したであろう。例え早乙女達の赤い裾が朝霧で濡れるとしても。

（堀河百首全釈・早苗・四〇一・公実）

7　花薄こよひ始めぬ秋風に今朝しもなどか朝じめりする（野）

…花薄は、今宵始めて吹いた秋風でもないのに、今朝という今朝どうして湿っぽくしているのだろうか。

（堀河百首全釈・薄・六二七・国信）

6・7は、夏と秋。7の「今宵」は「昨夜か」の意か。「朝しめり（る）」の初出（注2参照）。ともに「朝霧」、あるいは「朝露」で、対象が「裳裾」と「花薄」。6には不快感がある。6の参考歌「みたやもり今日は五月になりにけり急げや早苗おいもこそすれ」（後拾遺集・夏・二〇四・好忠）、「いかばかり田子の裳裾もそほつらむ雲間も見えぬ頃の五月雨」（新古今集・夏・二二七・伊勢大輔）。

別当実行の卿の家の歌合に、五月雨をよめる

8　雲晴れぬ五月来ぬらし玉衣　むつかしきまてあましめりせり

（本論冒頭の散木奇歌集歌）

残りのあつさといへる事を

9　秋来ては風ひやかなる暮もありあつれしめらひむつかしの世や（世・人）

…しめらひはあつくむし〳〵とむして汗など出くるしき体なりといへり（散木奇歌集集注篇・三七四、『堀河百首肝要』の引用。永久百首・残暑・俊頼）

松虫を

10　夕されば野辺もや物を思ふらん松虫なきて露しめりせり（野）

（散木奇歌集集注篇・四二五、永久百首・松虫・俊頼）

8以下は俊頼歌三首で、8・9は「むつかし」を含み、湿ることで体感される6と共通する不快感を強調する。10の「露しめり」に涙の連想があり、「野辺」は擬人法による「2：“しめる”の語義」の⑥「憂いに沈む」の初出と思われる。

雨中網代

11　網代木にかくるかがりのしめるまで険しき夜半のむら時雨かな（川辺）

…網代に掛けた篝火が湿ってしまうほどに激しく降る、夜の村時雨であるなあ。（為忠家初度百首全釈・五一四・為忠）

塩屋雪

12　しほぎつむあまのかまやに雪ふりてたつ煙さへしめらひにけり（塩屋）

…塩木を積み上げて、海人が潮水を煮詰めている釜屋に雪が降り積もり、立ち上る煙までもずっと湿っているなあ。

（為忠家後度百首全釈・四八八・親隆）

13　五月雨は焚く藻の煙うちしめりしほたれまさる須磨の浦人（塩屋・人）

…五月雨は藻塩を焚く煙まで湿らせて晴れぬ思いをつのらせるよ。日頃より一層しとどに涙の流れてやまぬ須磨の浦のわび人よ。

（新古典大系 千載集・夏・一八三・俊成、久安百首）

11は「篝火」が、実際は「2：“しめる”の語義」の①と言うより、②「消える」だろう。12・13の「煙」は①「水分を吸ってしっとり濡れる」。後の28・32も「煙」を同様に詠んでいる。13は上句・下句が分かれているが、三句に⑥「憂いに沈む」意もあって、上下がつながっている。

14　薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕べとたれか言ひけん（籬）

…薄霧が立ちまようまがきの花の、朝のしっとりとしたあでやかさ。秋は夕に限ると誰が言ったのであろう。

（新古典大系 新古今集・秋上・三四〇・清輔、久安百首）

15　心から夜の間の露にしほたれて朝じめりする女郎花かな
（野）　（平経盛朝臣家歌合・草花・一八・伊行）

〈萩〉

16　秋萩の上葉下葉の朝じめり心くるしき花の顔かな（野）
（出観集・三二三）

14～16は三首とも秋の霧、または露の「朝じめり」で、対象は「花」。15「しほたれ」、16「心くるしき」とあり、その花は擬人法で「2．“しめる”の語義」の⑥と解される。

題不知

17　たどりたつ音ばかりして山里はしめりぞわたる小野の篠原
（原）　（出観集・五二八）

蚊遣火

18　夕立のそそきて過ぐる蚊遣火のしめりはてぬるわが心かな
（人）
…蚊遣火が湿る意に、心が湿っぽく沈む意を懸ける。
（和歌文学大系　長秋詠藻・一三二）

〈恋〉

19　いつとなく思ひに燃ゆる我が身かな浅間の煙しめるよもなく（人）
…○湿る―火勢が衰え（和歌文学大系　山家集・六九六）

〈百首　恋十首〉

20　さまざまの嘆きを身には積みおきていつしめるべき思ひなるらん（人）
…○いつしめるべき―いつになったら思いが鎮静する。「思ひ」に掛けた「火」の縁語で、火の勢いが静まる意を掛ける。
（和歌文学大系　山家集・一四九五）

17は「しめり」で静寂を言うので④「静かになる」。18～20の対象は「心」と「思ひ（火）」で、②「消える」。下句が20に一致する25が同様。18は⑥の「物思いに沈む」もあるか。19は「煙」だから、打ち消しではあるが、12・13のように①も重なるか。

十二番　左　女房（良経）

21　ひとり寝の袖のなごりの朝じめり日かげに消えぬ露もありけり（人）

右勝　家隆

道芝を分けて露けき袖ならば濡れても暮れを待たましものを

右申云、左歌無指難、…　判（俊成）云、左、ひとりねの袖の名残の朝じめりばかりは、恋の心すくなくや、……
…独り寝の床で夜の間に流した涙に濡れた袖は朝になってもしめりが残っていて、日が射しても乾かない。露は日に照らされれば消えるものであったはずなのに、消えない露もあったのだ。○露　涙を喩える。▽朝の別れの悲しみがいつまでも消えない思い。
（新古典大系　六百番歌合・朝恋・八〇三、八〇四）

十四番　左勝　有家朝臣

22 道芝の露分けぬ袖も打ちしめり月にも鳥の音こそつらけれ

（人）

右　家隆

ながむれば千里の秋も雲消えて月にこもれる有明のそら

左歌、月にも鳥の、といへる、さきの六番左にや侍りつるにおなじきを、これは、露わけぬ袖も、といへり、右歌、……左、歌合の歌といひつべし、勝に侍るべし（判者 俊成）

（建久六年民部卿〈経房〉家歌合・暁月・一一九、一二〇）

21・22は、ともに対象は「袖」。「しめり」は涙による。後に掲げる30も類似する。

五首歌人人によませ侍りける時、夏歌とてよみ侍りける

23 うちしめりあやめぞ香る郭公鳴くや五月の雨の夕暮（沼？）

…しっとりと空気はしめり、あやめの香がよく立つことだ。郭公の鳴く五月の、雨の降る夕暮れよ。

（新古典大系 新古今集・夏・二二〇・良経、建久九年後京極殿御自歌合・夏夜・四〇）

23は、以下の歌を先蹤表現とする。重なる部分を傍線で示す。

・郭公なくや五月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな

（古今集・恋一・四六九・読人しらず）

・万代に変はらぬものは五月雨のしづくにかをるあやめなりけり

（金葉集・夏・一二八・経信、永承六年内裏根合・一）

・五月雨は焚く藻の煙うちしめりしほたれまさる須磨の浦人

（新古典大系 千載集・夏・一八三・俊成、久安百首）

これらの和歌に加え、次の「源氏物語」の表現も注意される。

・夕闇すぎて、おぼつかなき空の気色の曇らはしきに、うちしめりたる宮（蛍）の御けはひも、いと艶なり。（蛍）

・たそがれ時の、いみじく心細げなるに、雨は、冷やかにうちそゝぎて、秋果つる気色のすごきに、（薫・匂宮の）うちしめり、濡れ給へる匂どもは、世の物に似ず、艶にて、……（総角）

・霧のまぎれに、さまよく歩み入り給へる（薫）を、「宮の、忍びたる所より、帰り給へるにや」と、見るに、露にうちしめり給へるかをり、例の、いと、さま殊に匂ひくれば、……（宿木）

23は、五月雨の湿気で菖蒲の香りが強く体感されている。「うちしめり」は、郭公の声の情感にも響き、雨の夕暮れの空間的広がりを感じさせている。その「うちしめり」は「源氏物語」では、「2.“しめる”の語義」の⑤「態度、性格がしっとり落ち着いている」に該当する。そうした品格美を俊成は「須磨の浦人」に見い出し詠んでいる。23に人物は描かれないが、源氏物語と俊成歌の美意識に基づき、五月雨の夕暮れの味わいを深めている。その点では、26・27・31も類似

する。以上から、23が「しめる」を詠む和歌の達成を表すように思うのである。

以下は、用例のみを挙げ、説明は省略するが、本論文の末尾に別表で「しめる」を詠む和歌1～32全体の整理を示す。

24　岩根ふむ山のたつきも夕されば芝摺り衣うちしめりつつ
（人）　（正治初度百首・羈旅・一八五・三宮惟明親王）

25　あさましや浅間の岳に立つ煙いつしめるべき思ひなるらん
（人）　（正治初度百首・恋・九八一・季経）

26　うちしめり花橘ぞ香るなる五月の雨の夕暮れの空（野？）
（正治後度百首・五月雨・九一九・慈円）

27　初瀬山いりあひの鐘の音までもうちしめりたる五月雨の頃
（山）　（建仁元年老若五十首歌合・夏・一二六・雅経）

28　霜こほる柴のさ枝や潤ふらん煙ぞしめる山のべの里（里）
（建仁元年老若五十首歌合・冬・三二七・家隆）

29　山人の焼きすさみたるしひ柴のあとさへしめる雪の夕暮
（山）　（建仁元年老若五十首歌合・冬・三八〇・良経）

30　ならはずよ秋なればとて置くか露片敷く袖の打ちしめるまで（人）　（建仁元年影供歌合・初恋・一四五・後鳥羽院）

31　春雨にこぬれ隠れて鶯の声うちしめるゆふぐれの空（野？）
（千五百番歌合・春二・二三〇・通親）

32　五月雨は鹿火屋の煙うちしめり山田の暮れにかはず鳴くなり（山田）　（千五百番歌合・夏二・八九五・家隆）

五　まとめ

「湿る」は、まず物語等の散文作品で、人の描写で用いられることが多い。歌語として用いられることは5の経信に始まるとされるが、「堀河百首」の二首が確実と思われる。それは、「後拾遺集」時代からの自然・田園の描写の一環かもしれない（注6）。8以下の俊頼で歌語として確立し、その中には人間の客観的描写もある。擬人法で自然の人間的把握もなされ、なお自然や物に寄せた人の心情を反映した描写（⑥の意味がある）へと、散文を学んだ詠み方に深化し、日本的叙情性を表す代表的な語になる。

別表

番号	本	しめる	対象	歌集	作者	主体・意味
1	花の香	染める	身	兼澄集	兼澄	C
2	薫物の香	染める	身	高遠集	高遠	C
3	花の香	染める	心	和泉式部集	和泉式部	C
4	紅涙	染める	袖	赤染衛門集	赤染衛門	C
5	涙	湿る	衣手	経信集	経信	C①
6	朝霧(露)	湿る	裳裾	堀河百首	公実	C①
7	朝霧(露)	湿る	花薄	堀河百首	国信	A①
8	**五月雨**	**湿る**	**玉衣**	**六条宰相家歌合**	**俊頼**	C①
9	残暑	湿らひ	世	永久百首	俊頼	AC①
10	夕露	湿る	野辺	永久百首	俊頼	B①⑥
11	時雨	湿る	篝火	為忠家初度百首	為忠	A②
12	雪	湿らひ	煙	為忠家後度百首	親隆	A①
13	五月雨	湿る	煙	久安百首・千載集	俊成	AC①⑥
14	薄霧	湿る	花	久安百首・新古今集	清輔	A①
15	夜露	湿る	女郎花	経盛歌合	伊行	B①⑥
16	(霧・露)	湿る	萩の花	出観集	覚性	B①⑥
17		湿る	篠原	出観集	覚性	A④
18	夕立	湿る	蚊遣火・心	長秋詠藻	俊成	C②⑥
19		湿る	煙・思ひ(火)	山家集	西行	C①②
20		湿る	思ひ(火)	山家集	西行	C②
21	(涙)	湿る	袖	六百番歌合	良経	C①
22	(涙)	湿る	袖	建久六年民部卿家歌合	有家	C①
23	五月雨	湿る	菖蒲	後京極殿御自歌合・新古今集	良経	A①
24		湿る	柴摺衣	正治初度百首	惟明	C①
25		湿る	煙・思ひ(火)	正治初度百首	季経	C①②
26	五月雨	湿る	花橘	正治後度百首	慈円	A①
27	五月雨	湿る	鐘の音	老若五十首歌合	雅経	A①
28	霜	湿る	煙	老若五十首歌合	家隆	A①
29	雪	湿る	椎柴	老若五十首歌合	良経	A①
30	露	湿る	袖	建仁元年和歌所影供歌合	後鳥羽院	C①
31	春雨	湿る	鶯の声	千五百番歌合	通親	A①
32	五月雨	湿る	煙	千五百番歌合	家隆	A①

◎描写の主体…A：自然の描写、B：自然の擬人化、C：自然や物に寄せた人(心)の描写　◎意味……①～⑥

注

注1……『和歌文学大辞典』「六条宰相家歌合」で、六条宰相は顕季とするのは誤り。日本文学web図書館の辞典ライブラリーで「実行主催のこの歌合に、「六条」を冠して称するのは、実行邸が顕輔の邸宅内にあったためであろう。」とある「顕輔」も顕季が正しい。

注2……「薄霧の籬（まがき）の花の朝湿り秋は夕べと誰かいひけむ」（久安百首・九三八・藤原清輔、新古今集・秋上・三四〇）を初出例とするが、後述のように修正されるべきだろう。

注3……「雲が堅田の沖の方へ動いてゆく。あのあたりはしぐれているのだろうか。海士の漁火の火影がやや暗くなった」（久保田淳著『訳注藤原定家全歌集上』二三〇頁、1490頭注。）

注4……以下、「新編日本古典文学全集（小学館刊）」を「新編古典全集」、「新日本古典文学大系（岩波書店刊）」を「新古典大系」と略称する。

注5……この部分については、古田正幸氏の懇切なご教示に拠る。

注6……「しめる」に似た歴史的展開が見られる語に「けしき」がある。「本来、漢語であるが和語化して、……『枕草子』『源氏物語』など散文に多く、勅撰三代集では、…人の気持ちが表情などでわかるという用法だけである。それが自然の風景を対象とするようになり、自然の景物によってかもし出れる情趣を含蓄して詠出されるようになるのは、『後拾遺集』の紫式部詠「みよし野の春のけしきに霞めどもむすぼほれたる雪の下草」（春上・一〇）あたりを初出とするか。…いずれも「春のけしき」「空のけしき」のように、自然の情趣を全体的に総括風にとらえようとするもの……（歌ことば歌枕大辞典）」

（受付日：二〇二二年六月三日、受理日：二〇二二年六月二十七日）

柏木 由夫（かしわぎ よしお）
現職：大妻女子大学名誉教授
大妻女子大学人間生活文化研究所特別研究員
東京教育大学大学院日本文学専攻修士課程修了.
専門は平安時代和歌文学.
現在は平安時代中・後期の和歌文学に関する研究を行っている.
主な著書：『平安時代後期和歌論』（単著，風間書房）、『金葉和歌集 詞花和歌集』（新日本古典文学大系、共著、岩波書店）、『金葉和歌集 詞花和歌集』（和歌文学大系、共著、明治書院）、『平安和歌・物語に詠まれた日本の四季』（単著、風間書房）

About the waka term “shimeru-wet-”

Yoshio Kashiwagi
Professor Emeritus at Otsuma Women’s University
Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women’s University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

Key words：Shimeru-wet-, Uruou-wet-, Minanotono Toshiyori, Genjimonogatari